

2014年度は学内に於いては「車輪の再発明プロジェクト」（研究代表者：城一裕講師）に参加し、主に映像メディアに関わるディスカッションを進めた。また、プロジェクト履修生の作品制作の実践的な指導を行った。

学外での活動としては、点光源による影のプロジェクションを行うインスタレーションを発展させ、体験者の影を非連続的に変化させる作品などを制作・発表した。

今年度より、学外での展示のための制作や現地での設営などに学生参加の機会を設けるよう心がけた。作品の制作・発表の実際を習得するためには、運営や設営に関わる人やシステムを体得する事が重要であり、学内での活動だけでは限界があるためである。今年度は国内外（秋田、北九州、川口、ミラノ）の展示で計6名の学生に参加してもらった。

学内での活動

1 「車輪の再発明」プロジェクト

プロジェクトの研究分担者として、授業および作品制作・展示に関わった。

- ・「マテリアライジング展II」（7/18-8/8、東京藝術大学美術館陳列館）卒制展で試行的作品二点「針穴をあけた紙を通したRGB光源による網点プロジェクション」および「写植文字盤による多光源植字」（瀬川晃准教授との共作）を展示した。



針穴をあけた紙を通したRGB光源による
網点プロジェクション



写植文字盤による多光源植字

学外での活動（展示）

1 『ワンダフルワールド』（東京都現代美術館、7/12~8/31）

夏休み期間に親子連れを想定して企画された展覧会へ参加し、「10番目の感傷（点・線・面）」の展示の他、新作として「ハローワールド！」を制作した。

HelloWorld!とはプログラミング言語習得での最初のコーディングであり、それに伴う初期衝動的な喜びを象徴する言葉である。普段何気なく見ている物の振舞いや現れ、視ることそのものの喜びをテーマにした作品である。

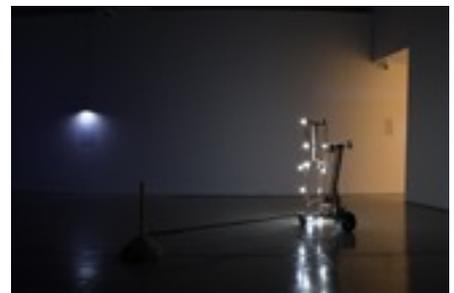
子どもたちのための作品でもあるが、乳幼児の視覚体験を通して、そこに立ち会う親（大人）が視覚の初期衝動を思い起こせるような構図を想定して制作した。



ハローワールド！

2 『MEDIA/ART KITCHEN』（国際芸術センター青森、7/26~9/15）

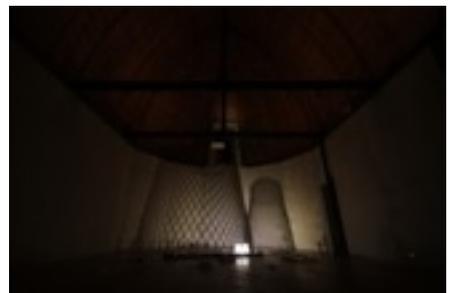
夏期の滞在制作でバイオリジカルモーションを利用して、人が歩行する様子を再現する装置「M.M.M.」を制作・展示した。限られた時間での制作ということもあり、スケッチ的な作品であり、さらに追求するべきところも多いが、キネティックとイメージの組み合わせによる見る人の記憶の喚起という着想は今後も続けて制作していきたい。



M.M.M.

3 『Scopitone Festival』（ナント市プルターニュ公爵城、9/15~21）

フランス、ナント市の古城での「10番目の感傷（点・線・面）」の展示。



The Tenth Sentiment

4 『メディア芸術の林間学校』（十勝千年の森、10/1~13）

平原に建てられた小屋の中での「10番目の感傷（点・線・面）」の展示。

5 『メディア芸術祭秋田展』『ネオクラシック・カクノダテ』（角館町、太田家米蔵、安藤醸造本店、10/10~20）（秋田市アトリオン、10/25~11/3）

仙北市角館町では太田家米蔵での「ニコダマ」の展示と、安藤醸造本店蔵座敷での「M.M.M.」の展示。

秋田市アトリオンでは「10番目の感傷（点・線・面）」の展示を行った。



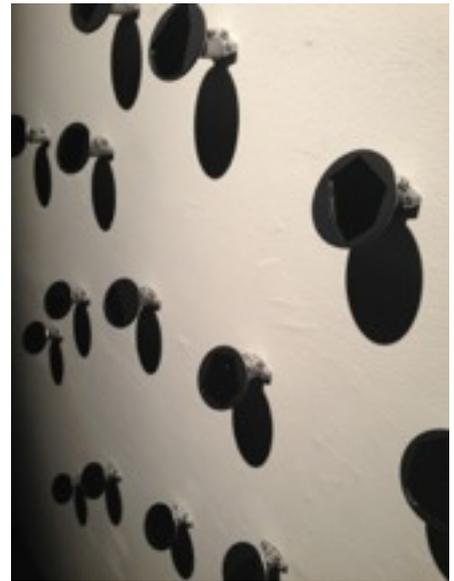
ニコダマ

6 『コチ・ビエンナーレ』（コチ、12/12-3/29）

インド初のビエンナーレであるKochi-Muziris Biennaleで日本から唯一のアーティストとして参加した。現地滞在で制作した「LOST#12」を展示。制作とビエンナーレ視察のため二度現地に赴き、それぞれコチとデリーで講演を行った。

7 『アート・オブ・メモリー』（北九州市美術館、1/4-2/22）

「10番目の感傷（点・線・面）」と新作「multi reflex」を展示。新作では一つの光源を鏡で振り分けて、鑑賞者自身の不連続な影を投影するものである。



multi reflex

8 『クリエイティブリユースでアート！』（調布市文化会館たづくり、1/31-3/22）

調布市内で集められた廃材を元に作品を制作・発表。映画撮影所から収集した装置を分解して得られた部品を使い、インスタレーション「props」を制作した。

9 『日常事変』（川口市アートギャラリー・アトリア、4/13-5/10）

新作「以心分身」を制作・展示。「multi reflex」を発展させて、45個の光源を使ってグリッド状に分断された鑑賞者の影を壁面に投影する作品を制作した。映像から得られる身体イメージに異変を起こす試みであり、プラトンの「洞窟の比喩」を体感することを企図している。壁面に映る影に対して、直に視る我々の身体は実体だと思いがちだが、実はそれとてももう一つの影に過ぎない。



以心分身
